様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６年　６月２０日現在

機関番号：３２５０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６１２

研究課題名（和文）フォーリナー・トークから見るドイツのトルコ系移民コミュニティの言語的特徴

研究課題名（英文）Linguistic characterization of Turkish immigrants in Germany through foreigner talk

研究代表者
林　徹（Hayasi, Tooru）

放送大学・その他の部局・副学長

研究者番号：２０１７３０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：統合コースを受講するために多くの移民・難民が集まるベルリン・ノイキョルン地区のＡ校を一種の移民コミュニティと見立て、コミュニティの主要メンバーである講師のフォーリナー・トークが、Ａ校コミュニティに後から加わった受講者たちに、どの程度共有されているのかを明らかにするため、講師と元受講者（スペイン、トルコ、ポーランド、カザフスタン、シリアの出身者各１名）とのインタビュー、Ａ校講師へのアンケート等を実施した。収集したフォーリナー・トークの用例を分析した結果、フォーリナー・トークの特徴と考えられる語用論的に動機付けられた語順が、講師と元受講者の間でかなりの程度共有されていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
移民コミュニティを言語的に特徴付ける試みは、その言語的多様性や複合性を強調して結論とすることが多かった。つまり、共通性がない点が共通するという、消極的な特徴付けに留まっていたと言える。本研究課題では、簡略化された言語レジスタであるフォーリナー・トークに注目することにより、これまで周辺的現象として扱われてきたフォーリナー・トークに、相手を同一コミュニティの成員として言語的に包摂する働きがある可能性を示唆するデータを示すことで、移民コミュニティの言語的特徴付けに新たな視点を提供した。

研究成果の概要（英文）：Based on the assumption that School A in the Neukoelln district of Berlin is a kind of immigrant community, where many immigrants and refugees gather to take integration courses, I investigated the extent to which the "foreigner talk" of the instructors, who are key members of the community, is shared by the students who joined the community later. The main data consist of recordings of interviews in German with an instructor and his five former students from Spain, Turkey, Poland, Kazakhstan, and Syria, as well as results of a questionnaire survey of School A's instructors. Analysis of collected data of "foreigner talk" revealed that pragmatically motivated word orders, which may be considered to be a characteristic of the German "foreigner talk", are shared to a considerable extent between the instructor and former students.

研究分野：言語学

キーワード：フォーリナー・トーク　移民　ドイツ語　言語接触　言語の簡略化　統合コース

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
1995 年以来本研究を開始するまで、本研究の代表者は、ベルリン・クロイツベルク地区等において、いくつかの公立中等学校や語学学校において、生徒や受講生を対象にアンケートやインタビューを行い、特にコードスイッチング（同じ会話の中での複数の言語の使用）や言語切り替え（相手や場面による言語の選択）において、話者がドイツ語とトルコ語のどちらの言語を選択するかという観点からデータを収集してきた（①)。
その結果は、先行する研究が明らかにしようとしてきた、言語的多様性自体が移民コミュニティの特徴であるという、以前からある説を裏付けるものであったが、一方で、実質的には、移民コミュニティを言語的に特徴づけることを放棄するのと同じであり、その点については疑問を感じ続けていた（②)。
以上の点を考え続ける過程で、それまで周辺的な現象と見なし、分析から除外してきたフォーリナー・トークが、その名が示唆するように相手を他者（外国人）として遇しているのではなく、むしろ相手を同じコミュニティの成員として、言語的に包摂しようとする話者の言語使用の反映ではないかという仮説に思い至った。
フォーリナー・トークは、母語話者など、ある言語の運用能力が高い者が、非母語話者など、その言語の運用能力が低い対話相手に用いる、簡略化された言語レジスタである。本研究の代表者は、移民の言語の研究と並行して、ユーラシアに広く分布する Abdal と呼ばれる小集団が持つ秘密語の研究も行なってきた。特に、中国新疆ウイグル自治区南部で使われる秘密語 Eynu の調査を通じ、秘密語もまた、小さな集団を維持するという社会的機能を持つ場合があること、さらに、多くの秘密語にはフォーリナー・トークと同じく、簡略化された言語レジスタに共通する特徴が見られることにも着目すべきと考えた（③)。

２．研究の目的
⑴ 当初の目的
フォーリナー・トークが相手を同じコミュニティの成員として言語的に包摂しようとする意識の反映とする仮説を確かめるために、本研究は当初、ベルリンのトルコ系移民コミュニティに固有のフォーリナー・トークの特徴を見つけ出し、それによってトルコ系移民コミュニティを言語的に特徴づけることを目的として開始された。具体的には、これまで調査に協力してくれていた、トルコ系の移民背景をもつ生徒が大半を占める公立中学校を主なフィールドとして、授業の観察、教師へのインタビュー、教師・生徒へのアンケートを通じ、ドイツ語やトルコ語の運用能力の異なる生徒や教師の間で観察されるフォーリナー・トークの例を収集し、移民背景の話者に固有のフォーリナー・トークを特定し分析することで、トルコ系移民コミュニティの言語的特徴を明らかにする予定であった。
ところが、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響を受け、ドイツへの入国制限措置が講じられただけでなく、調査を予定していた上記の公立中等学校では、部外者の入校が制限され、さらに長年協力者となっていただいていた教師の離職もあり、アンケートやインタビューへの協力が得られない状況となった。そこで、引き続き協力を申し出てくれたベルリン・ノイキョルン地区の語学学校（以下では「A校」と呼ぶ。）の受講者を対象として、研究計画を見直し、研究の目的と研究の方法を、以下のように変更した。

⑵ パンデミックを受けて設定した新たな目的
統合コース（Integrationskurs）を受講するために多くの移民・難民が集まるベルリン・ノイキョルン地区のＡ校を一種の移民コミュニティと見立てることにより、コミュニティの主要なメンバーである講師の発話に現れるフォーリナー・トークを基準として、そのようなフォーリナー・トークが、A校というコミュニティに後から加わった受講者たちに、どの程度共有されるのか、受講者による変更が加えられることがあるのかどうかを明らかにする。その結果、講師が導入したフォーリナー・トークが変化して受講者の間に広まっている状況が確認できるならば、フォーリナー・トークが（移民）コミュニティの維持に関係している可能性を示すことができると考える。

３．研究の方法
Ａ校でドイツ語やドイツ文化を教える講師へのインタビューを通じて、自身が用いるフォーリナー・トークについて自省してもらい、その例を収集するとともに、特徴について報告してもらう。また、実際の授業を参観することで、授業中に現れるフォーリナー・トークを観察し、可能ならば録音または録画をさせていただく。これらのデータからフォーリナー・トークの例を抽出し、フォーリナー・トークとして使われる簡略化や特定の語彙が、Ａ校で使われる範囲や状況について分析する。

４．研究成果

(1) 統合コースの受講者と講師のやり取りにおけるフォーリナー・トークの特徴

A校にて授業中の講師と受講者のやりとりの録音を希望したが、ドイツ全土の統合コースを監督する BAMF（連邦移民難民局）により、原則として部外者の参加は許されないことが判明した。そこで、A校の講師である G. Aktaş 氏に依頼し、すでに統合コースを終了した元受講者に対し、授業の外でインタビュー（対話）をしてもらい、そのやりとりを録音した（2022 年 12 月にA校の空き教室を使い実施）。インタビュー参加者は、スペイン、トルコ、ポーランド、カザフスタン、シリアの出身者各１名の５名で、それぞれのインタビューは約 30 分であった。

録音データは文字起こしを行い、インタビューアーとなった Aktaş 講師にはそれをすべて確認してもらった上で、さらに、対応する標準的なドイツ語のテクストを追加し、データセットを作成した。現在も分析中であるが、これまでのところ、語順について以下の点が明らかとなった。

ドイツ語の主節における語順ルールを、統語論的なもの（主動詞や助動詞の前置）と語用論的なもの（トピックを主動詞や助動詞の前に移動する）に分けて考えた場合、統語論的ルールの逸脱は頻繁に見られ、かつ逸脱の種類も多様であった。一方、語用論的語順ルールに関しては、発話の冒頭に現れる文の成分を比較したところ、ドイツ語母語話者である講師と、移民や難民の背景を持つ元受講者の間に、ほぼ同じ傾向が認められた（以下の図１、２を参照のこと）。これは、講師と受講者の間に成立したフォーリナー・トークの影響の影響と考えられ、このような傾向が移民同士の会話にどのように反映し発展するかを捉えるのが、今後の課題である。（④）

図１：発話頭成分の意味（割合）

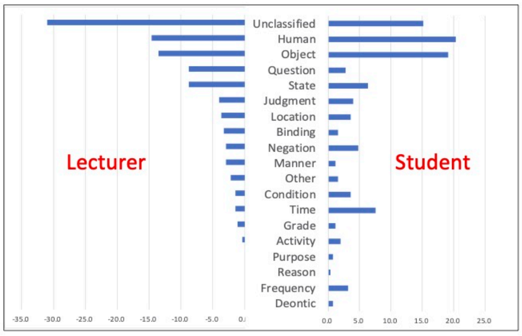
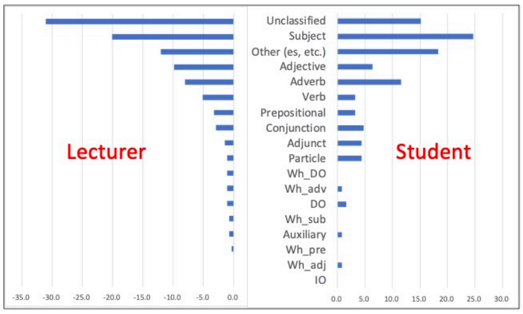


図２：発話頭成分の文法カテゴリ（割合）



(2) 回答の少ないアンケートの活用

インタビューとは別に、ドイツ語のフォーリナー・トークについて、A校の講師（約 30 名）を対象としてリモートでのアンケートを依頼したが、十分な回答が集まらなかった。そこで、A校以外の関係者にも依頼したが、やはり分析に十分な数の回答を集めることができなかった。そこで、サンプル数の少ないアンケート回答を活用する方法の検討を、すでに実施済みで十分な回答が得られている他のアンケート結果を利用し、回答に揺れの多い回答者の回答から、全体の回答の分布を推定することを試みた。(⑤)

＜引用文献＞

① 林徹・安達真弓・新井保裕（編）. 2018.『学校を通して見る移民コミュニティ：多言語使用と言語意識に関する報告』(東京大学言語学論集別冊 2) 東京大学文学部言語学研究室.

② Pfaff, Carol W. 1988. Linguistic and social determinants of Turkish/German bilingualism of migrant children in Berlin. *Slavica Lundensia* 12, 49-74.

③ Hayasi, Tooru. 2012. Foreign and indigenous properties in the vocabulary of Eynu, a secret language spoken in the south of Taklamakan. In: Lars Johanson and Martine Robbeets (eds.) *Copies versus cognates in bound morphology*, pp.423-437. Leiden: Brill.

④ 林徹. 2024.「統合コース講師と受講者のドイツ語のやりとりに見られる非標準的な語順：L1 話者と L2 話者の談話における発話頭成分の比較」 ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会での高等発表.

⑤ Hayasi, Tooru. 2024. Contribution of "indecisive" speakers to linguistic research. *Turcologica: Selected essays on Turkish linguistics: the Anadolu meeting* 127, 217-234.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 林　徹	４．巻 23
２．論文標題 移民・難民が生み出す非標準的ドイツ語変種に関する覚え書き： 統合コース受講者の資料から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と 言語の変容に関する総合的研究	６．最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hayasi, Tooru	４．巻 127
２．論文標題 Contribution of "indecisive" speakers to linguistic research	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Turcologica: Selected essays on Turkish linguistics: the Anadolu meeting	６．最初と最後の頁 217 - 234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 林　徹
２．発表標題 話者の判断のばらつきから見るトルコ語指示詞の特徴
３．学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hayasi, Tooru
２．発表標題 Contribution of "indecisive consultants" to linguistic research
３．学会等名 20th International Conference on Turkish Linguistics（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 林　徹
２．発表標題 観察できなかったデータ：ベルリンとイスタンブルでの指示詞に関するアンケートを材料として
３．学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 年次総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 林　徹
２．発表標題 統合コース講師と受講者のドイツ語のやりとりに見られる非標準的な語順：L1話者とL2話者の談話における発話頭成分の比較
３．学会等名 2023年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 林徹	４．発行年 2021年
２．出版社 三省堂書店	５．総ページ数 20
３．書名 時間と言語（第５章分担執筆，編集：嶋田珠巳・鍛治広真）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関